

2014年12月5日

高大連携フォーラム・第1部
ディスカッション

コーディネーター
椋本 洋

ディスカッション概要

- 午前中の第1部について寄せられた質問用紙を整理すると次のようになります。
 1. 3校の実践事例についての質問
 2. 達成度テストについての質問
 - (1) 技術的な問題
 - (2) 理念的な課題

とくに、未来型の「大学入試」について

3校の実践事例の背景にある学習指導要領の内容を討論のはじめにあたり整理しておく

社会の変化による能力観の転換と
学習指導要領の学力観

社会の変化による能力観の転換が、高等学校の学習指導要領にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

現代社会に求められる能力

本田由紀(2005). 多元化する「能力」と日本社会(NTT出版)

非正規雇用

近代社会 (メリトクラシー)	現代社会 (ハイパー・メリトクラシー)
基礎学力	生きる力
標準性	多様性・新奇性
知識量・知的操作の速度	意欲・創造力
共通尺度で比較可能	個別性・個性
順応性	能動性
協調性・同質性	ネットワーク形成力・交渉力

正規雇用

ただし、能力の移行ではなく、両者のバランスが必要

学習指導要領の変遷

近代型能力

ポスト近代

昭和
33～
35年
改訂

教育課程の基準としての性格の明確化
(道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等)
(系統的な学習を重視)

教育水準
の向上

(実施)
小学校:昭和36年度、中学校:昭和37年度、高等学校:昭和38年度(学年進行)

昭和
43～
45年
改訂

教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」)
(時代の進展に対応した教育内容の導入)
(算数における集合の導入等)

マンパワー

(実施)
小学校:昭和46年度、中学校:昭和47年度、高等学校:昭和48年度(学年進行)

昭和
52～
53年
改訂

ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化
(各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる)

能力主義
の徹底

(実施)
小学校:昭和55年度、中学校:昭和56年度、高等学校:昭和57年度(学年進行)

平成
元年
改訂

社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成
(生活科の新設、道徳教育の充実)

臨教審

(実施)
小学校:平成4年度、中学校:平成5年度、高等学校:平成6年度(学年進行)

平成
10～
11
年改訂

基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成
(教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)

PISAショック
能力観の転換

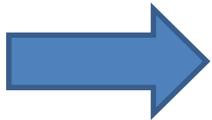
(実施)
小学校:平成14年度、中学校:平成14年度、高等学校:平成15年度(学年進行)

学習指導要領のねらいの一層の実現の観点から
学習指導要領の一部改正(平成15年)

指導要領改訂の基本的な考え方

学力の重要な3つの要素を育成します

- 基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせます
- 知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくみます
- 学習に取り組む意欲を養います



学校教育法第30条の第2項

高等学校学習指導要領における活用力(思考力・判断力・表現力等)の育成や教科横断的な指導について 【主なポイント】

・ 総則

○基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

○各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実する。

*各教科等を通じて、説明、論述、討論、批評等の言語活動を充実。

学習指導要領の「習得」、「活用」、「探究」の関係

- ①「基礎的・基本的な知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」は子どもに身に付けさせるもの、「習得・活用・探究」はそのための学習活動の類型を示したものである。
- ②各教科では、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」とともに、観察・実験をしてその結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を行う。それを総合的な学習の時間等における教科等を横断した問題解決的な学習や「探究」活動へと発展させる。
- ③これらの学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではない。
- ④各教科での「習得」や「活用」、総合的な学習の時間を中心とした「探究」は決して一つの方向で進むだけではない（「習得→活用→探究」の一方通行ではない）。
- ⑤これらの学習の基盤となるのは言語に関する能力であり、そのために各教科等で言語活動を充実。

一文部科学省初等中等教育局教育課程課 「新指導要領Q&A」

総合的な学習の時間

○課題発見・解決能力、論理的思考力等を育成するため、**教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、生徒の興味・関心等に基づく学習**など創意工夫を生かした教育活動を行う。

※各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする。

*各教科等を通じて、説明、論述、討論、批評等の言語活動を充実。

○国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

• ○情報を主体的に活用する学習活動を重視する。

一中教審高大接続部会配布資料5-2

実践事例1についての質問

大阪府教育センター附属高等学校「探究ナビ」
の実践

—新たな「学び」が、ここから始まります—

恩知 理加（大阪府教育センター附属高校 教頭）

山元 聡（大阪府教育センター附属高校 首席兼探究科主任）

Q: 探究科と教科との連携はどのように
なっているのでしょうか？

⇒ 探究の授業のカリキュラム設計 (P) とその評価 (c) の関係ともつながる。

本日の特別講演の中でも荒井先生からもふれられている内容。

Q2: 生徒一人ひとりの個の意思決定を集団としての意思決定(社会的合意・コンセンサス)へリフレクティブさせる取り組み・仕組みの例を教えてください。

実践事例2についての質問

高経大＋高経附「高大コラボゼミ」
—双方向的高大連携の試み—

矢野 修一（高崎経済大学）

矢野先生から補足説明があります

Q:教科と「高大コラボゼミ」の関係について、実態と先生のお考えを聞かせてください。

実践事例3についての質問

- 京都工芸繊維大学「ダビンチ入試」
—テストで何をどのように測るか？—

内村 浩(京都工芸繊維大学アドミッションセンター教授)

ダビンチ入試

- 試験で測っている知力とは？
- 現実には...周囲の人たちと相談しながら問題を解決している。(分散認知)
- 選抜機能⇒理解力、活用力、表現力、コミュニケーション力を測定するダビンチ入試
- 高校と大学をつなぐプログラムとして設計されている。(入試の設計は、内村REPを)

荒井先生、この入試に関するコメントをください

特別講演について

大学入試の日本的風土は変えられるか
一達成度テスト(仮称)を考える

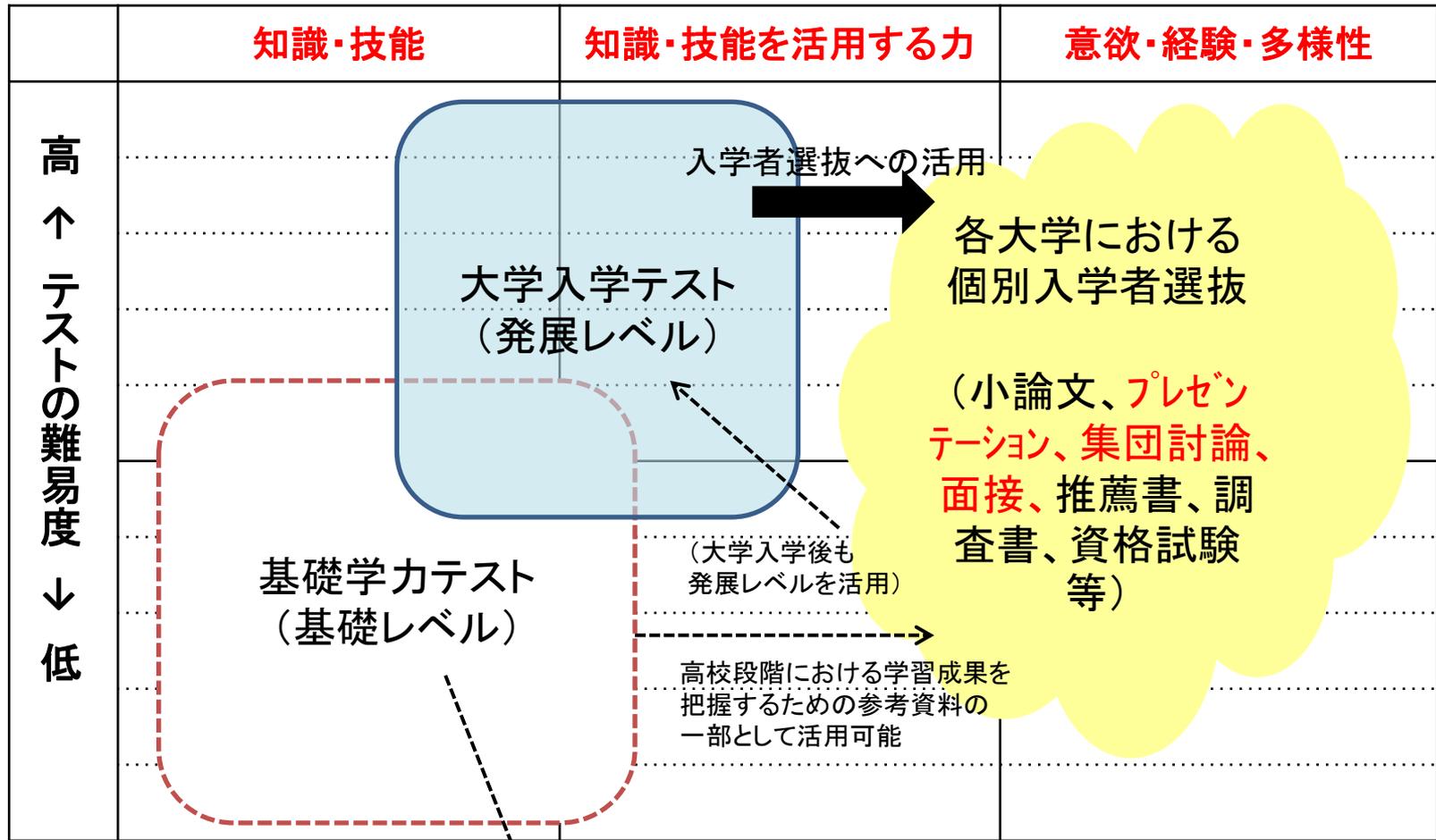
荒井克弘(独立行政法人大学入試センター 副所長)

学力観の整理

- 日本において、かつて、学力は、知識・スキルだけでなく、動機（「やる気」など）や特性（「従順で素直な性格」や「前向きの性格」など）をも示す指標として機能していた。
- ところが、近年両者の間の相関関係が低下し、学力が動機や特性の指標として十分に機能しなくなった。そのため、学力とは別に社会人基礎力を育成・評価する必要が出てきた。

基礎学力テスト・大学入学希望者学力評価テストと大学入学者選抜への活用方策イメージ

一般入試・推薦・AO入試の区分を見直し、入学者選抜において、
多面的、総合的に評価する総合型選抜へ抜本的に改革



推薦・AO参考資料の一部

大学入学者選抜のための仕組み。

高校教育の質の確保・向上のための仕組み。

荒井先生から紹介する時間が不足した点への補足をお願いします。

- 従来の日本的風土との違い

選抜から「学力診断」へ

- 新しいテストがダビンチにとっては、有効か？
- 高校の調査書の内容が、大学の学習のベースになっている。
- 在学する高校レベルよりも...
- センター試験の良問

- 学びのスタイルを変える
- 入試制度改革と高校改革及び大学改革とリンクすべき

理念的な問題

Q: 未来型の大学入試についてもう少し詳細にお話ししてください。

荒井先生から出された問題提起

- 中教審高大接続部会答申案への疑問
- 合教科・科目・総合型試験の有効性(スライド20)
- 大学入試センターのミッション: 専門の接続性を探しながら(スライド21)

委員である荒瀬克己(大谷大学教授)から、コメントをお願いします

荒井先生と荒瀬先生の討論

- ここで、しばらく時間をいただき、政策の立案にかかわった荒瀬先生に、荒井先生から出された様々な意見に対し、ご意見をいただき、お二人に討論をしていただきたいと思います。

技術的な課題

- 専門高校の場合はどうなるのでしょうか？
- 現行のセンター試験はどのような扱いになるのでしょうか
- 合教科型のサンプル問題はいつ示されますか？
- 「パターン化が早いと」指摘されましたが、先生はどのような対策を考えますか
- エリート育成の側面はどう考えられますか

終りに

- 高大連携フォーラムはこれまでも高校と大学の教員などの関係者が一堂に会して「高大の接続教育」を考えて参りました。本日の特別報告、並びに3校の実践報告は、そうした私たちのたどってきた道のりにふさわしいものでした。今後も、引き続きこうした草の根の高大連携を考えて実践していきたいと考えています。
- 本日の登壇の先生方、会場の荒瀬先生ありがとうございました。
- ご清聴ありがとうございました。